

論文審査の結果の要旨

論文題名

『うつほ物語』論—子ども流離譚—

論文審査の要旨

本論文の試みは、副題にいう「子ども流離譚」という観点から、『うつほ物語』（『源氏物語』以前の十世紀末成立、二十巻）を照射することで、この物語の従来解釈を全面的に転倒させんとすることにある。

本論文は、「序論」、「本論（全三章十二節）」、「結論」よりなる。氏の研究を紹介するにあたって、『うつほ物語』の構成を確認したい。この物語は、「俊蔭」巻、「藤原の君」巻、「忠こそ」巻という三つの冒頭部をもち、「藤原の君」巻が「あて宮求婚譚」という源正頼（あて宮父）主催の賑々しい祝祭世界を開示しているのに対して、「俊蔭」巻は清原俊蔭が異郷に漂流し、秘琴・秘曲を伝授されて帰朝するという艱難辛苦の物語としてある。対極的な内容の物語であるが、俊蔭娘があて宮の求婚者の一人藤原兼雅と結ばれ、彼らの子仲忠もあて宮への求婚者となり、さらに正頼孫女一の宮と結婚することで、双方の世界は徐々に接近し、有機的に結合していく。そして、物語の後半（「葦開」上・中・下、「国譲」上・中・下、「楼の上」上・下巻）になると、正頼の祝祭世界は、あて宮が入内し、皇子が誕生することで、その立場をめぐって源氏と藤原氏が対立するという陰謀渦巻く政治世界へと変貌し（「国譲」）、一方、俊蔭系物語は、「いぬ宮（仲忠と女一の宮の娘）」に秘琴・秘曲が伝授されることで、俊蔭→俊蔭娘→仲忠と続いてきた音楽の系譜物語が完結し、最後は京中を陶醉させる大演奏会を以て閉じられる。

富澤氏は俊蔭系物語を次のようにとらえる。俊蔭の乗る遣唐使船は難破して異郷に迷いこみ、そこで秘琴・秘曲を伝授されるが、日本に残した両親はその間に亡くなっていた点にまずは着目し、俊蔭は琴の琴一族の日本の始祖たり得たが、それは親子の別離という代償あつてのことであり、このような犠牲を親子間に強いるところにこの物語の基調があるという（第一章「子どもの流離」第一節「俊蔭の流離」）。そして孤児となった俊蔭娘と藤原兼雅との一夜孕みの物語で、仲忠が誕生するも、兼雅との関係が絶えたために、この母子は流離することになる。その後、彼らは父兼雅に発見されて、引き取られるが、今度はそのために兼雅の他の妻子たち（宰相娘と小君の母子等）が逆に見捨てられて、これまた流離することになる。しかし、その彼らも俊蔭娘や仲忠の尽力によりいずれ保護されることになるとする（第一章第二節「仲忠の流離」、第三章「総論『うつほ物語』における子」第一節「物語全体における子どもの流離と救済」）。富澤氏はこのように子どもの流離と救済の無限の繰り返しでこの物語は組織されているとし、しかもこのような反復現象は物語テキストのいたるところに散在してあるという。後半のいぬ宮（仲忠と正頼娘女一の宮の子）をめぐり物語でも、いぬ宮が秘琴伝授の物語を完成に導く役を担いつつも、伝授に要する

一年間は母女一の宮と離れ離れの生活を強いられる。いぬ宮は一般的には俊蔭という父方の系譜上に位置づけられるが、実は母方の血を紛れもなく引きつぐ存在であることを、産養での賀宴の言葉から検証し（第二章「子どもの救済—後半部における子」第一節「いぬ宮と「巢」「卵」「雛」）、そのうえで、いぬ宮は母女一の宮の琴の奏法をこそ我が音楽にしたいと密かに願望していると論じている。俊蔭を祖とする秘琴物語というのでは、おさまりきらない何かがいぬ宮像には孕まれているというのだ（第二章第二節「いぬ宮と母女一の宮」）。

正頼系についても、それは俊蔭系とは対極的物語と評されているが、子どもが犠牲になるという点において同質であるという。富澤氏はあて宮求婚の場に集う男たち、なかでも学芸によって身を立てようとしている者たちに父母がいない点をまず指摘する。継母に讒言され世から出奔した忠こそ、唐人に誘拐されて父母と引き裂かれた良岑行正、戦いで一族郎党すべてを惨殺された藤原季英、天涯孤独の源仲頼、母に先立たれ父嵯峨院にも知られずにいた源涼…。彼らにあっては、社会的栄達はもはや絶望的であり、一発勝負をかけて求婚の場に参集してきているという（第一章第三節「忠こそ流離」、第三章第一節「物語全体における子どもの流離と救済」）。しかし、であればあるほど、あて宮が東宮妃となって、彼らの幻想が霧散した瞬間、そこには惨状が繰り広げられることになる。なかでも、本論文では源実忠や仲頼の家庭崩壊の物語に焦点をあてている。あて宮への悲恋で遁世した実忠の物語について、その遺児「真砂子君」の悲惨な死が、「巢」「巢守」「雛」という歌言葉の伝統に依拠しつつ、かつ一方でそれから離反しながら象られていることを論じている（第一章第四節「実忠・真砂子君と「巢」「巢守」「雛」）。また後半の「国譲」の世界は、藤原氏（兼雅等）の擁する梨壺腹皇子か、源氏（正頼等）の後見するあて宮腹皇子のどちらが立坊するかの物語である以上、やはりここでも主役は子どもであるという。あて宮への悲恋で出奔した先の実忠にしても、源氏一族は実忠を社会復帰させようとするし、故真砂子君の妹袖君を源氏の将来をみすえて探しだし回収しようとする。またこの政争のために、藤原忠雅（兼雅兄）の家庭崩壊の危機が語られているところもすぐれてうつほ的であるという（第三章第二節「後半部における子どもの流離と救済」）。

また子どもを「抱く」「膝に据う」という言葉が「蔵開」巻以降の後半世界に入ると、俊蔭系にも正頼系物語にも頻出している点を取りあげ、ここから物語の構造を読みとく（第二章第三節「子どもを「抱く」「膝に据う」）。仲忠が小君（兼雅息）・いぬ宮を、兼雅がいぬ宮・梨壺腹三の宮・宮の君（仲忠息）・朱雀院十皇子を、あて宮が一の皇子・四の皇子を…。さらには皇子たちに序列をつけたうえで抱く帝、あて宮の皇子を膝にすえる仲忠、いぬ宮を抱きたくても抱けないあて宮、実子を抱かない兼雅と仲忠、いぬ宮を抱き落としてしまうあて宮の皇子たち…というように枚挙に遑がない。抱くことは自己の管理下におくことであり、各自思惑あって子どもを抱いている。子どもたちの方も必ずしも無心ではなく、何某に抱かれない、抱かれたいと思っている子ども、抱いてくれる大人の期待とは裏腹な思いで抱かれている子供もいる。この抱かれる側への着眼は見事であり、物語はテーマをしばりこみ、立坊物語なり秘琴伝授の物語なりを確実に終らせんとしているにもかかわらず、それを裏切るような様々な動きが子どもたちの内面に孕まれつつあるという。また「恋ふ」「恋し」という男女関係で使われる言葉が、この物語ではその特異な親子関係を象る言葉として多用されているという重要な指摘もある（第一章第五節「親子関係における「恋ふ」「恋し」」）。

本論文は主役たちの子どもだけでなく、その他大勢の端役としての子どもにも目配りしている。あて宮求婚譚で登場する文遣いの童の「宮あこ」や、物語後半で活躍する朱雀帝第十皇子や「宮はた」についても言及している。とくに宮はたは縦横に動きまわることで、様々な情報をかき集め、またその情報を無放縦に拡散させてしまう役割をはたしており、子どもゆえの特性が活かされているという（第二章第四節「文使の童」）。また、物語前半では「女童」は集合的に表象されていて、その家の権勢の何たるかを表す指標の役割しか果たしていないが、後半になると、「これこそ」「あこき」の造型にみるように登場人物の一人として自立してくるという。また童舞の童として、「宮あこ・家あこ」や、とくに「さかの（俊蔭娘の産婆）の四人の孫」をも俎上にのせて、彼らが己の居場所をそれぞれに定めて独立していく様を追跡している。（第二章第五節「女童・舞を舞う童」）。

「子ども流離譚」という物語への接近方法、これはいささか迂遠なアプローチであるという印象がなくもなかった。しかし、以上のようにみえてみると、本論文は、『うつほ物語』の新たな読みの可能性を開示するものとして高く評価される。既に『うつほ物語』の子どもを扱った先行研究はあるが、それらは断片的な指摘以外ではなく、本論文のように物語全体を俯瞰する論にはなっていない。物語世界の周縁にあると思われた子どもが、いかに物語の隅々にまで浸透し、物語の内実をも規定しているかということ、のみならず、物語後半にいたっては、いたるところに散種された子どもなるモチーフが、世界を完結させんとする物語の力学と抗うような制御不能な動きをみせていることを見事に証明している。『うつほ物語』はこれ以上語りつがれたならば、子どもから放散される諸力によって、もはや收拾がつかない事態にまでたちいたっていたことであろう。だからこそ、「楼の上」巻を以てしてかろうじて物語に終止符が打たれたのであった。また、俊蔭系・正頼系という弁別も、富澤氏からすると、もはや本質的なものではないことにもなる。さらに本論文の登場により、『うつほ物語』が『源氏物語』に与えた影響についても従来の研究では不十分であるのも明らかとなった。『源氏物語』における子ども像について、そのかなりの部分が実は『うつほ物語』からの引用であることが自ずと了解されたのである。本論はあくまで源氏論ではないので、その点詳論されていないが、双方の影響関係についての貴重な指摘が幾つかかなされている（第二章第四節「文使の童」）。

最後に若干注文をつける。富澤氏の論が斬新であればあるほど、本論の研究史上における位置づけ、ならびに物語文学論としての意味づけが曖昧である点が惜しまれる。氏は「序論」で、『うつほ物語』の研究史の整理を試みている。それによると、物語の冒頭を複数もち、本文に錯簡や脱落があり、巻序も乱れ、さらにあまりに異質な世界観が混雑していることから、この物語の研究は、「成立過程研究」や「構想論」として始まったという。この物語を理解するためには、成立事情を明らかにすることが近道であるとする見通しがそこにはあった。しかし、成立論は早晩その限界性を露呈させることとなり、一九七十年以降は、「現存している本文に忠実に解釈する方向」へと研究の重心が移り、異質なものを共存させつつ生成していくこの物語のタフな構造を解明すべく研究が進んだのだが、それらもっとも重要な時期の研究が十二分に対象化されておらないのである。わずかに、高橋亨、三田村雅子、室城秀之、伊藤禎子各氏による「祝祭論」なる観点からの研究についての言及があるが、それらの成果が検証されておらず、そのため子どもに特化した本論文の位置も曖昧になってしまっている。

祝祭論という一連のうつほ物語研究は、とくにミハイル・バフチン著『フランソワ・ラブレ一の作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里訳、一九七四年）の翻訳の登場に刺激されてのものである。『うつほ物語』には饗宴場面が多いこともあって、祝祭論の単純な応用版から始まったが、この物語固有の祝祭の構造と物語の生成の具体相を究明した優れた論が登場した。例えば、祝祭はあて宮求婚譚だけの話ではなく、後半部の立坊争いにしても、それを「闇の祝祭」ととらえる研究もあるし(伊藤論)、また物語の言葉を祝祭の表現構造として論じた研究もある。富澤氏はこれらと自身の研究とをすりあわせる必要があったのではないのか。

富澤氏に無理な注文をしているのではない。氏自身が祝祭論の論脈に本論を位置づけ得ることの可能性を示唆しているからなのだ。氏は、『うつほ物語』は祝祭・饗宴の物語として位置づけられてきた。あて宮求婚譚という祝祭の時空に、父母のいない人物たちは、積極的に自らを投げ活気づかせてきた。しかし、そうした祝祭の裏には、彼らの子どもたちの犠牲があった。中世の稚児物語では、祝祭の後は稚児の死で終わる話が多い(第三章第一節)等と論じている。ここにあるのは従来の祝祭論の完全な書きかえである。氏がいわんとしているのは、『うつほ物語』にあっては、祝祭なるものが子どもの犠牲死というかたちで現象していること、『うつほ物語』は数多の子どもたちの人身御供の文学であること、さらには平安文学のみならず、すぐれて日本的な祝祭の構造としてこの問題があることである。富澤氏は稚児の凄惨な犠牲死を以てして終る中世稚児物語をあげている。確かに足利義満が北山第に後小松帝を迎えての、二十日間にわたる稚児尽くし盛儀のことが想起されもする。多くの寺院から徴集された稚児たちによる「童舞」等が披露され、法体姿の義満と燦然と輝く美童義嗣とが鎮座見物していた。しかし、それは北山文化の断末魔の輝きとでも評すべく、その直後に義満は謎の死をとげ、義嗣も遠からず惨殺されるのであった。さらには、「忠こそ」の物語が中世説教節『愛護若』と似通っていることも偶然ではなかろう。富澤氏は従来の祝祭論を正面から受け止めて、本論を定位置させてもよかった。いや、祝祭を云々せずとも、これだけ多くの子どもたちの流離と悲惨を語る『うつほ物語』とは何なのか、それを位置づける批評軸をさらに打ち立てる必要があろう。本論文が独創的であればあるほどに、氏の研究のさらなる発展を期待してやまない。

論文審査主査 神田 龍身 教授
鈴木 健一 教授
三田村 雅子 特別非常勤講師
(フェリス女学院大学名誉教授)